

高齢者スポーツにおける救護体制の構築とファーストレスポonder人材育成について

坂梨 秀地

保健医療学部救急救命学科

【背景】運動・スポーツを行う環境を提供するには、安心・安全に行うためのサポート体制の構築が必要であり、高齢者スポーツに起きやすい事故・ケガなどを把握しそれに対しての方策と、サポートする関係者の人材育成プログラムが必要である。

【目的】高齢者スポーツにおける救護体制の在りかたと、「ファーストレスポonder」の人材育成のための教育プログラムを構築することを本研究の目的とする。

【方法】研究1：高齢者スポーツにおける救急搬送事例および心停止症例の検討

2015年の救急搬送データおよび2010～2014年院外心停止データを用いて、高齢者スポーツに起きやすい疾病・ケガおよび心停止について検討した。

研究2：救護体制の在りかたと、ファーストレスポonder育成プログラムの検討

研究1結果および先行研究から、本学と連携可能な救護体制の在りかたを考案し、そのための人材育成プログラムを提案する。

【結果】1年間の救急搬送データより、事故種別「運動競技」で搬送された件数は35,010件であり、そのうち65歳以上の救急搬送された件数は1,174件（3.3%）であった。発生場所でみると公衆の場997件（84.9%）が最も多く、そのうち公的運動施設（58.5%）、学校施設（11.8%）での発生が高かった。傷病名では打撲血腫（30.4%）、次いで骨折（24.5%）であった。5年間でのスポーツ中の高齢者の目撃あり心原性心停止症例では、61症例あり、非運動時の心停止症例に比べ社会復帰率が74.1%（OR=4.8）と有意に高かった。

【まとめ】高齢者スポーツの現場には、打撲や骨折等に対応でき、かつ速やかにAEDを使用した心肺蘇生法が実施できる体制が必要である。そのためには「ファーストレスポonder」の育成が必要である。

本研究の結果から、高齢者スポーツにおける救護体制の在りかたと、教育プログラムについて提案する。

【救護体制の在りかた】

- ・3分以内に電気ショック可能な場所にAEDの配置
- ・打撲や骨折、熱中症や内科的疾患に対応できる資器材および搬送資器材の配置
- ・本学の医療学生の活用

プロトコルの違いがアドレナリン投与のタイミングと脳機能予後に及ぼす影響

植田 広樹, 田中 秀治, 樋口 敏宏, 坪倉 寛明, 坂梨 秀地, 柳 聖美, 久保木 翔大

蘇生機能解析室

【背景】救急救命士の現場活動プロトコルは、地域メディカルコントロール（MC）協議会によって作成されているが地域別に大きな差異がある。

【目的】傷病者への接触からアドレナリン投与までの時間が脳機能予後に及ぼす影響を都道府県別に調査・比較することにより検討すること。

【方法】全国ウツタインデータから救急救命士によりアドレナリンを投与された13,326症例を抽出し、傷病者へ接触した時刻から現場活動時間の10分以内にアドレナリンが投与された症例の全投与例に対する割合とCPC1-2を都道府県別に検討した。

【結果】10分以内の投与率が最も高かったのは愛知県で75.1%（838/1,116）CPC1-2は5.4%、次に高かったのは石川県で56.0%（70/125）CPC1-2は6.4%であった。低かったのは広島県が5.5%（6/109）CPC1-2は0.9%、秋田県が3.4%（6/179）CPC1-2は1.1%であった。

【考察】アドレナリンの投与までの時間と脳機能予後が強く関与していることが明らかとなった。今後、各地域MC協議会は、自地域のウツタインデータの投与時間を分析し、可能な限りアドレナリンを早期投与できるようにプロトコルの見直しが必要である。